

クリヴェルリ作《ある僧正の像》

佐々木英也



左：クリヴェルリ《ある僧正の像》国立西洋美術館所蔵  
上：《聖ロレンツォ》ルガノ、ティッセン・コレクション  
右上：《聖アコスティーノ》ユトレヒト、大司教美術館所蔵  
右下：《洗礼者ヨハネ》オックスフォード、アシュモLEAN美術館

カルロ・クリヴェルリ Carlo Crivelli (1430/35—1494以後)は〈祭壇画の画家〉とよばれるように数多くの祭壇画を残している。ヴェネツィアのムラノ派の系統から出、初め後期ドイツ・ゴシックの影響も強く受けたと考えられるが、中年以後は彼と同世代のマンテーニャ、ジョヴァンニ・ベルリーニ、コスメ・トゥーラの芸術からも多くを学びとった形跡がある。カルロは激しい性格の持主だったらしく、若いとき(1457年)に同業の画家の妻を奪って刑事事件をひき起し、200リレの罰金と6ヶ月入牢の憂日に逢い、その後中部イタリアのマルケ地方に逃れ、アンコーナ、アスコリなどで生涯の大半を送った。これらの土地の教会堂のために描いた多くの祭壇画が後にばらばらに分解されて各国の美術館や収集家の手に渡り、それらがもともとどこに所属し、どのような構成をとっていたか、これを確定することがクリヴェルリ研究における重要なテーマとなっている。

1961年にヴェネツィアで開かれた「クリヴェルリとクリヴェルリ派」展は、クリヴェルリに関するもっとも重要な展覧会であり、同時にこの年にはクリヴェルリに就ての注目すべき著書論文がいくつか出版された。同展を組織したピエトロ・ザンペッティ Pietro Zampetti のカタログ *Crivelli e i Crivelleschi*, Venezia, 1961, と同じ著者による *Carlo Crivelli*, Milano, 1961, アンナ・ボヴェロ Anna Bovero の *Tutta la pittura del Crivelli*, Milano, 1961, またフェデリコ・ゼーリ Federico Zeri の論文 “Cinque schede per Carlo Crivelli”, *Arte Antica e Moderna*, 1961, p. 158—176, などである。

国立西洋美術館所蔵《ある僧正の像》についてはそれまで例えばベレンソン B. Berenson の *Ita-*

*lian Pictures of the Renaissance, Venetian School*, 2 vols., Tome 1, London, 1957 のカルロ・クリヴェルリの項に「ロンドン、バトラー・コレクション旧蔵オーガステイン(アウグスティヌス)」とだけ記載されているというように、ごくわずかの記述しか見られなかったが、上記の1961年の諸研究によって、製作年代や原初の状態などがかなり明らかとなってきた。それらを紹介する前にまず来歴について知れるところを記すと、画面の裏に貼付されたラベルからして、この作品は Charles Butler コレクションからロンドンの画商 Dowdeswell & Dowdeswells に移り、そこから松方氏が購入したと思われる。その後わが国に来て松方コレクション分散後は某会社の所有に帰し、1963年に国立西洋美術館がこれを購入した。昭和5年に開かれた「第3回松方氏蒐集絵画展覧会」の目録番号24(編集発行人石井柏亭)にはこの作品が《或る僧正の像》(ヴィットリオ・クリヴェルリ作)として掲載されている。ここに出てくるヴィットリオ(ヴィットーレ)とはカルロの弟である。彼は兄カルロの影響を強く受け、その工房で協力した人で、両者いずれの作品か問題となることが多い。石井柏亭氏がいかなる根拠によってこれをヴィットーレの作としたか不明であるがおそらく当時行われていた意見に従ったのであろう(例えばベレンソンは初め *Inventario degli oggetti d'arte delle provincie di Ancona e Ascoli Piceno*, Roma, 1936, の中で後に述べる《洗礼者ヨハネ》などと共にこれをヴィットーレの作とし、後に1957年の前掲書でカルロの作と訂正している)。

さて《ある僧正の像》の属していた祭壇画の再構成の問題であるが、ザンペッティはゼーリの説を

ほぼ承認しているのので、ゼーリの前掲論文に則ってみてゆきたい。

ゼーリはまずベレンソン前掲書第165図にみえるカルロ・クリヴェルリの多翼祭壇画（ロンドン、プリンスレー・マーレー氏旧蔵）の復元的再構成に疑問を提出し、その中央上部に置かれた《聖ロレンツォ》をこの祭壇画とは別個の3点の板絵と結びつけ、これらでひとつの群をなすと考えた。そこに国立西洋美術館作品が登場するわけである。いまそれらを列記すれば、

《聖ロレンツォ》テンペラ、板絵、58×35cm（ルガノ、ティッセン・コレクション）

《聖アグスティーノ（アウグスティヌス）》テンペラ、板絵、57×38cm（ユトレヒト、大司教美術館）

《洗礼者ヨハネ》テンペラ、板絵、73×35cm（オックスフォード、アシュモレアン美術館）

《ある僧正の像》テンペラ、板絵、132×35cm（パトラ・コレクション旧蔵、国立西洋美術館）

ところでゼーリはベレンソンと同様に西洋美術館作品を《聖アグスティーノ》とし、ユトレヒト作品を《ある僧正》としているが（ザンペッティではこれと反対に西洋美術館作品が《ある僧正》でユトレヒト作品が《聖アグスティーノ》）、混同を避けるために今は上のように記しておく。

これら4点の作品でもっとも共通するものは横幅の寸法と背景の植物装飾様式であり、人物描写、その描線の性質にも同一時期の作と思わせる要素がたしかに認められる（中では《洗礼者ヨハネ》の表現がやや弱く、助手の手を多く感じさせる）。問題は各作品の縦の寸法が異なる点にあるが、ゼーリによればこの祭壇画は二つの半身像《聖ロレンツォ》《聖アグスティーノ》と二つの全身像《洗礼者ヨハネ》《ある僧正の像》から成っていた。《洗

礼者ヨハネ》の縦の寸法が足りないのは、板絵の下部が傷んだので後に切り取ったためである。

次に製作年代の問題に移ると、これらの作品はベルリン美術館の《聖母子とペテロと聖人たち》の祭壇画（1488年）ときわめて類似点が多く、1480年代の末の作品にちがいない。とすればここに有力な資料がひとつ残っている。つまり1487年7月16日に「アスコリに住むヴェネツィア市民………画家カロルス」がカステル・サン・ピエトロのサン・ロレンツォ聖堂の司祭フラ・グラツィオ・ディ・ロレンツォからこの教会堂の祭壇画製作のため前払いの金を受け取ったという記録である。ただゼーリは必ずしも断定しているわけではなく、さらに今後の研究が必要なることを附言している。もしこれら4点の作品がカステル・サン・ピエトロの祭壇画に属していたとすれば、そのときカルロの助手をつとめた者は「通称ギリシャ人ことミケレ」という人物であった。

前述のようにザンペッティはこの説を承認し、その著書 *Carlo Crivelli* では上の4点をはつきりとカステル・サン・ピエトロの祭壇画と結びつけている。これに対してボヴェロはゼーリ、ザンペッティに同調せず、カステル・サン・ピエトロ祭壇画を「失われた作品」に入れ、国立西洋美術館作品について何も記していない。そして《洗礼者ヨハネ》を正当作品から外し、伝「クリヴェルリ」としている。また《聖ロレンツォ》と《聖アグスティーノ》（ボヴェロもこれを《ある僧正》とする）については、両者ともに1480年代の終りか90年代の初め、つまり作者の晩年の作品であり、そこに機械的なくりかえし、一種のマンネリズムが認められ、弟子の手が大幅に介入していること、しかしカルロの作品として承認できる旨述べている。